様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １２ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１１９５０

研究課題名（和文）看護学実習における動機づけのプロセスと看護実践能力の発達に及ぼす影響

研究課題名（英文）The Motivational Process in Nursing Practicum and its Influence on the Development of Clinical Nursing Competence.

研究代表者
馬場　美幸（Baba, Miyuki）

愛知県立大学・看護学部・助教

研究者番号：３０６１６４４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：看護大学生の臨地実習への動機づけと変化、動機づけの影響要因を明らかにする目的で、質問紙調査と面接による4年間の縦断調査を行った。学習動機づけ、自尊感情、自己効力感、首尾一貫感覚の各尺度の変化をみると、2年生では、向上志向、有意味感が低下し、2年、3年では自尊感情が高まっていた。また、動機づけと、自尊感情、自己効力感、首尾一貫感覚には有意な関連がみられた。4年間面接を継続した16名の分析からは、4学年に共通する動機づけを高める特徴として「周囲の人々からの支えや刺激」など7カテゴリが抽出され、さらに2年生では「患者を受け持つ責任の自覚」、3年生では「自ら行動することへ意欲と自信」が生じていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義は、看護大学生の臨地実習に対する動機づけの特徴とその変化、動機づけに影響する要因を縦断的に明らかにしたことである。これにより、学生の成長過程に応じた学習支援や具体的な実習指導方法の検討に寄与できる。効果的な学習の支援は学生の学びの深化と看護観の形成を促進し、看護の専門性を追求する姿勢および就学と就業継続意欲の向上にも寄与できると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify nursing students’ motivation toward clinical practicum and the changes and factors therein. A four-year longitudinal study using questionnaires and interviews was conducted. The analysis covered 831 completed questionnaires, using the Learning Motivation Scale, the Self-Esteem Scale, and the Sense of Coherence Scale et al.. Results showed decreased “improvement orientation” and “meaningfulness” among second-year students, while “self-esteem” tended to increase from years one to three.
In the interview study, 16 individuals were interviewed continually over four years. Results identified seven motivational factors common to all the four years of the study, including “support and stimulation from surroundings.” In addition, second-year students were motivated by “awareness of the responsibility of caring for patients” and third-year students by the “desire and confidence to act on their own.”

研究分野：看護教育学

キーワード：看護学生　動機づけ　臨地実習　縦断調査

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2015 年の厚生労働省の調査によると約 1 割の学生が留年もしくは休学、あるいは退学しており、日本看護協会による報告（2015）では、新卒看護職員離職率は 7.5%と示され、看護師の職業継続への対策は大きな課題である。日本看護協会（久常，2008）は、「今後求められる看護師の資質と教育」として、入学者確保、退学防止、早期離職防止を挙げている。看護師の離職を防止し質を確保するためには、看護を学び始める初期の段階の教育が重要であり、将来自ら学び続けることができる自律した看護実践者となる学生の育成が重要と考えた。

看護師の離職を防止し質を確保するためには、看護を学び始める初期の段階の教育が重要であり、将来自ら学び続けることができる自律した看護実践者となる学生の育成が重要と考えた。

学生にとって臨地は看護とは何かを問う場であり、学生の自ら学びたいという動機づけが高まれば、主体的に実習を展開することができるのではないかと考えた。さらに、実習において学生が患者と援助関係をつくり看護を実践した経験は、学生の看護観の形成に大きな影響を与え、その後の専門性を追求する姿勢や、職業を継続する動機づけにつながると考える。

実習は学びの多い場であるが、学生はこれまでに経験したことがないストレスや戸惑い（江川，2001）や困難を感じる（布作，1999）一方で、自分のコントロール感や価値を感じている学生は、患者との関わりや援助、助言を求める行動を積極的に行っていたこと（馬場，2018）から、自己の捉え方や情動が物事の感じ方や思考に影響し、困難を乗り越えて学び続ける姿勢に関連していると考えた。さらに、それらの学年を経た変化を検討することは、レディネスに応じた支援の方法を明らかにできると考えた。

そのため、本研究では、学生の特性を踏まえ、入学から卒業までの看護学生の実習にのぞむ動機づけとその変化の過程を明らかにしたい。

２．研究の目的

看護大学生の 4 年間の臨地実習にのぞむ動機づけとその変化、動機づけの要因を明らかにし、学生の特性、学習継続の意思と動機づけの関連を明らかにする。

本研究において、「実習にのぞむ動機づけ」は、看護学生の実習にのぞむ行動を誘導し方向づける要因によって、看護を学びたいという目標を持ち、行動をおこさせ、持続させるものとした。

３．研究の方法

同一の教育機関の学生を対象とした質問紙調査と面接からなる 4 年間の縦断調査を行った。

（1）調査方法

①質問紙調査（2016 年度のみ Web 調査）：1 年目の 2016 年度の web 調査は、回答しにくいとの意見があり回答数が少なかった。そのため、回答数を得るため、2017 年度より同内容の無記名質問紙調査とし、2017 年度に 1 年次調査から開始する大学を 1 校増やした。質問紙の回収は個別に返送を依頼した。

②面接調査：質問紙調査の協力依頼とあわせて面接調査協力の依頼を行い、同意が得られた方から面接連絡票を返信していただき、学生の学習の妨げや負担にならない日程を調整した。

（2）調査内容

①質問紙調査：属性（年齢、性別、居住環境、相談者の有無、アルバイトの有無、学校生活の多忙度、留年や休学の有無）、動機づけ（畑野（2013）の「学習動機づけ尺度」）、動機づけへの関連要因の尺度として、Rosenberg（1965）の「自尊感情尺度」、坂野ら（1986）の「一般性自己効力感尺度」、山崎（1999）の「首尾一貫感覚尺度」。

②面接調査：実習にのぞむ動機づけと影響した事柄、今後の実習に対する思い、看護を学ぶことに対する思いや感情、動機づけの変化の過程などについて半構造化面接を行った。

（3）分析方法

①質問紙調査

属性は単純集計を行い、尺度得点は各尺度の算出方法に従って集計した。統計解析は正規性を認めなかったため、ノンパラメトリック検定とし、学習動機づけ、自尊感情、自己効力感、首尾一貫感覚の各尺度の学年比較を Kruskal Wallis 検定で解析し、動機づけ尺度と自尊感情、自己効力感、首尾一貫感覚の相関は Spearman 順位相関係数を求めた。統計解析ソフト IBM SPSS Statistics 24 を用いて行った。

②面接調査

1 年生の逐語録から、実習にのぞむ動機づけと、動機づけに影響した要因を 1 単位として抽出して簡潔な一文（ラベル）とした。ラベルを意味内容の類似性からサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。2 年生も同様にラベルを抽出し、1 年生のサブカテゴリーと照合して演繹的にカテゴリー化を行ったのち、内容を表すサブカテゴリー名をつけた。また、新たに抽出されたまとまりにサブカテゴリー名をつけ、さらにカテゴリーを生成した。同様に 3 年生、4 年生のデータをカテゴリー化した。最後に、4 つの学年のカテゴリー比較表を作成し影響要因の特徴を考察した。

（4）倫理的配慮

愛知県立大学研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得て実施した。

４．研究成果

（1）質問紙調査の結果および考察

2017 年度から調査を開始した大学の 4 年目調査の終了は 2020 年度となるため、本報告は、1 年生から 3 年生までの縦断調査の結果を示す。

①対象者の属性

1 年生の回収数は 199 名（回収率 49.6%）、有効回答数は 175 名（有効回答率 43.6%）、2 年生の回収数は 349 名（回収率 92.3%）、有効回答数は 346 名（有効回答率 91.5%）、3 年生の回収数は 318 名（回収率 89.1%）、有効回答数は 310 名（有効回答率 86.8%）であった。

②学習動機づけ(3 下位尺度)、自尊感情、自己効力感(3 下位尺度)、首尾一貫感覚(3 下位尺度)の得点の学年比較

ｉ）学習動機づけ（向上志向、知的好奇心、将来不安）

「向上志向」の平均得点は、1 年生 19.2±3.4、2 年生 18.5±3.7、3 年生 19.4±3.2 で、2 年生で有意に下がっていた（p=.02）。「知的好奇心」の平均得点は、1 年生 17.2±4.1、2 年生 16.7±4.0、3 年生 16.8±3.9 で、学年差はみられなかった。「将来不安」の平均得点は、1 年生 13.8±4.4、2 年生 14.3±4.3、3 年生 14.1±4.2 で、学年差はみられなかった。

ii）自尊感情尺度

1 年生 28.2± 7.6、2 年生 29.8± 6.6、3 年生 30.7± 7.2 で、学年が上がるに従って、高くなっていた（p=.00）。

iii）自己効力感（行動の積極性、失敗に対する不安、能力の社会的位置づけ）

「行動の積極性」の平均得点は、1 年生 2.7± 2.0、2 年生 2.9± 2.0、3 年生 3.0± 2.2 で学年差はみられなかった。「失敗に対する不安」は、1 年生 1.6± 1.5、2 年生 1.8± 1.6、3 年生 2.0± 1.7 で、2 年生、3 年生は 1 年生より高かった（p=.03）。「能力の社会的位置づけ」は、1 年生 1.4± 1.3、2 年生 1.5± 1.3、3 年生 1.7± 1.3 で、3 年生は有意に高かった（p=.04）。

iv）首尾一貫感覚（把握可能感、処理可能感、有意味感）

「把握可能感」の平均得点は、1 年生 18.1± 4.7、2 年生 18.4± 4.2、3 年生 19.0± 4.6 で学年差はみられなかった。「処理可能感」の平均得点は、1 年生 15.8± 3.5、2 年生 16.0± 3.5、3 年生 16.6± 3.8 で、3 年生は高かった（p=.05）。「有意味感」の平均得点は、1 年生 17.0±3.0、2 年生 16.1± 2.8 点、3 年生 16.7± 2.7 で、2 年生で下がっていた。

ｖ）考察

2 年生において、動機づけ尺度の「向上志向」と、首尾一貫感覚の「有意味感」が低下し、自己効力感の「失敗に対する不安」が高まっていた。2 年生は一人の患者を受け持ち、看護過程を展開する基礎看護学実習を経験していたことから、実習における失敗の不安が現実的なものとなって高まり、あわせて、有意味感も低下し、これらにより向上志向が低下するものと考える。3 年生では、領域別実習を経験しており、より高度で自立した看護実践が求められる。そのため 3 年生は、看護の展開の難しさを一層感じ、失敗に対する不安が高まるものと考える。一方、実践を重ねる中で徐々に自信を得て、自尊感情、能力の社会的位置づけ、処理可能感、有意味感が高まり、これに伴い向上志向も高まっていくのではないかと考える。

③学習動機づけと、自尊感情、自己効力感、首尾一貫感覚の相関

ｉ）学習動機づけの「向上志向」

「向上志向」と有意な関連がみられたものをみると、1 年生は「自尊感情」(r=.214、p<.01)、「行動の積極性」(r=.223、p<.01)、「能力の社会的位置づけ」(r=.295、p<.01）と正の相関、2 年生は「能力の社会的位置づけ」(r=.222、p<.01)と正の相関、3 年生は「失敗に対する不安」(r=.247、p<.01)と正の相関を認めた。

ii）学習動機づけの「知的好奇心」

「知的好奇心」は、1 年生は「能力の社会的位置づけ」（r=.207、p<.01）、「有意味感」（r=.223、p<.01）と正の相関、2 年生は「行動の積極性」（r=.228、p<.01）、「能力の社会的位置づけ」（r=.246、p<.01）と正の相関、3 年生は「自尊感情」（r=.236、p<.01）、「失敗に対する不安」（r=.222、p<.01）、「有意味感」（r=.225、p<.01）と正の相関を認めた。

iii）学習動機づけの「将来不安」

「将来不安」は、1 年生は「行動の積極性」（r=-.225、p<.01）、「失敗に対する不安」（r=-.217、p<.01）と負の相関、2 年生は「失敗に対する不安」（r=-.231、p<.01）、「把握可能感」（r=-.246、p<.01）、「処理可能感」（r=-.215、p<.01）と負の相関、3 年生は「把握可能感」（r=-.209、p<.01）と負の相関を認めた。

iv）考察

1 年生では自己効力感の「行動の積極性」が高まると、動機づけの「向上志向」が高まり、「将来不安」が低下する傾向がみられた。1、2 年生においては、自己効力感の「能力の社会的位置づけ」が高まると、動機づけの「向上志向」と「知的好奇心」が高まる傾向がみられた。看護学生においては、実習で学んだことが職業や卒業後のキャリアに直結する。そのため、実習に積極的な取り組み、向上しようという意欲につながり、積極的に取り組むことにより将来への不安の低下につながると考える。

1、3 年生では、首尾一貫感覚の「有意味感」が高まると「知的好奇心」が高まる傾向がみられた。これは、1 年生においては初めての実習を体験し、3 年生では、領域別実習を半分ほど乗り越えた段階にあり、実習での実践にやりがいを感じたり、自分の進路や将来につながる実習での学習に価値や意味を見出しているほど、知的好奇心による動機づけが高まるものと考える。

3 年生においては、「把握可能感」が高いほど、「将来不安」が低かった。これは、様々な領

域の実習を経験して、実践の手応えや自己コントロール感が高まっていることによって、今後の実習や卒業後の看護実践への不安が減っていくことを示唆していると考える。

（2）面接調査の結果および考察

1 年生 40 名、2 年生 37 名、3 年生 35 名、4 年生 25 名に、その学年の実習終了後に面接調査を実施した。そのうち 4 年間継続して面接を行った 16 名の結果を以下に示す。

①1 年生の臨地実習にのぞむ動機づけ

133 ラベル、51 コード、17 サブカテゴリーから、【モデルになる看護師、支えになるメンバー、努力している友達を見て頑張りたい】【自分の知識や技術の不足に気付きよい援助ができるよう学習を重ねたい】【資格を取るためには実習が必要だから体調を整えて臨みたいし、やるしかないから頑張る】【患者の個別性やニードにあった援助をしたい】【患者に喜んでもらえたり、自分の努力を認めてもらえたりして成長が実感できて嬉しい】【コミュニケーションを学んだり、いろいろな援助を経験をして多くを吸収したい】【専門分野を学習したり、看護の役割が分かってきて、学ぶことが楽しい】の 7 カテゴリーが抽出された。

②2 年生の臨地実習にのぞむ動機づけ

187 ラベル、56 コード、17 サブカテゴリーから、【よく指導してくれる教員や指導者、理想となる看護師、協力し合えるメンバーがいたため、頑張る気持ちが高まる】【知識や技術の不足に気付き看護の視点も広がったので、準備をしてさらに学習を深めたい】【看護師や保健師になるためにはやるしかないので、生活や体調を整えスケジュール管理をして実習に臨みたい】【患者の意思や個別性を尊重し、患者の治療や生活にあわせて、丁寧な援助がしたい】【患者から喜ばれたり、援助の成果を実感し、自分の成長ややりがいを感じ、さらにステップアップしていきたい】【様々な患者や診療科のケアや援助を経験して、もっと自分を高めたい】【専門性や自分の興味関心が高まり、患者との関りや考えることが楽しくなってきた】【患者を受け持つ責任を感じ、看護師の考え方がわかってきたので、やりがいが高まりもっと頑張りたい】の 8 カテゴリーが抽出された。

③3 年生の臨地実習にのぞむ動機づけ

147 ラベル、57 コード、20 サブカテゴリーから、【教員やメンバーに支えられ、理想となる看護師、協力し合えるメンバーなので頑張ろう】【知識や技術の不足と勉強の必要性を感じ、自分から学習する】【実習を乗り切るために体調や生活を整えスケジュール管理をして前向きに頑張ろう】【患者の意思や対象に応じた寄り添える援助をしたい】【自分の成長や努力が認められ、患者に必要な援助が実践できた喜びを感じ、頑張ろう】【領域によって異なるコミュニケーションや援助を学び、自分に合った診療科を見つけたい】【関心のある分野や専門性の学習により、さらに関心が高まり楽しくなってきた】【受け持つ責任があるので自分から関わって学んでいこう】【患者の変化に気付いたことや自分の考えを伝えて行動したい】の 9 カテゴリーが抽出された。

④4 年生の臨地実習にのぞむ動機づけ

118 ラベル、46 コード、17 サブカテゴリーから、【メンバーとの支え合いや、周囲の助言から力を得たり、なりたい看護師像が明確になり、頑張ろうと思う】【周囲の助言を生かして自分に不足していることを改善し、向上させたい】【資格取得のためには行くしかないから、体調やスケジュールを整えて取り組みたい】【援助や学習成果が得られて援助や取り組みへの意欲が高まり、もっと頑張りたい】【領域の高い専門性を知り興味や関心が一層高まり、もっと学びたい】【職業としての誇りを感じて将来像が明確になったので、今の学びを将来に生かせるように頑張ろうと思う】【未経験の領域や興味がある視点について、具体的に経験したい】【受け持つ責任を自覚し頑張りたい】【自分から指導者に助言をもらおうとしたり、自分たちから自主的に調整して頑張る】の 9 カテゴリーが抽出された。

⑤4 年間の動機づけと変化

各学年のカテゴリーの内容と記載数から特徴をみると、1 年生は、【自分の知識や技術の不足に気付きよい援助ができるよう学習を重ねたい】が最も多く、知識・技術への学習動機が強かった。また、看護実践の喜びは【患者に喜んでもらえたり、自分の努力を認めてもらえたりして成長が実感できて嬉しい】という自分の課題や評価に関心が向けられていた。

2 年生も【知識や技術の不足に気付き看護の視点も広がったので、準備をしてさらに学習を深めたい】と、知識や技術の不足の実感は同様に多かったが、【看護師や保健師になるためにはやるしかないので、生活や体調を整えスケジュール管理をして実習に臨みたい】と、具体的なスケジュール管理を考えて実習に臨んでいた。また、【患者の意思や個別性を尊重し、患者の治療や生活にあわせて、丁寧な援助がしたい】と看護実践の対象に焦点を当て、患者の望みやニーズを考えたい思いが高まっていた。さらに、【患者を受け持つ責任を感じ、看護師の考え方がわかってきたので、やりがいが高まりもっと頑張りたい】という責任感の自覚による動機づけが生まれていた。

3 年生は、【知識や技術の不足と勉強の必要性を感じ、自分から学習する】と学習する価値を自覚し、自ら課題を解決しようと変化していた。また、【患者の変化に気付いたことや自分の考えを伝えて行動したい】思いが新たに生まれ、自分の考えを教員や指導者に主体的に伝えようとする姿勢が生じていた。

4 年生は、【メンバーとの支え合いや、周囲の助言から力を得たり、なりたい看護師像が明確

になり、頑張ろうと思う】とめざす看護師像を模索しながら頑張ろうとしていた。また、3 年生で生まれた主体的な行動はさらに高まり【自分から指導者に助言をもらおうとしたり、自分たちから自主的に調整して頑張る】という行動につながっていた。

⑥実習にのぞむ動機づけを高める要因の特徴

4 学年の動機づけを表にまとめ、それらの動機づけを高める要因の特徴を分析した結果、共通する要因として「周囲の人々からの支えや刺激」「知識・技術不足の実感による向上意欲」「体調・時間管理の重要性の理解」「患者の個別性を尊重する援助への志向」「援助の成果や自己の成長の実感による喜び」「多様な経験を通しての成長欲求」「専門性の高さや興味がある分野への知的好奇心」の 7 要因が抽出された。さらに、2 年生からは「患者を受持つ責任の自覚」、3 年生からは「自ら行動することへ意欲と自信」が要因として高まっていた。

⑦考察

1 年生は、初めての実習で【自分の知識や技術の不足に気付きよい援助ができるよう学習を重ねたい】という思いや、【患者に喜んでもらえたり、自分の努力を認めてもらえたりして成長が実感できて嬉しい】という自分の課題や評価に関心を向けていたが、2 年生は、【知識や技術の不足に気付き看護の視点も広がったので、準備をしてさらに学習を深めたい】と、知識や技術の不足の実感に加えて、さらに、【患者を受け持つ責任を感じ、看護師の考え方が分かってきたので、やりがいが高まりもっと頑張りたい】と責任感の自覚による動機づけが生まれていた。これは、2 年生になり、一人の患者を受け持ち、看護を展開する実習を経験したことによる責任感の芽生えと、看護者の立場で患者と関わる実践に近づいたことによる動機づけの変化と考える。

3 年生は、【患者の変化に気付いたことや自分の考えを伝えて行動したい】と、自ら行動する姿勢が生じていた。3 年生の実習は、基礎看護学実習で学んだことに基づき学習を深め、また、様々な領域の実習を重ねて、次第に自信をもって行動でき始める時期である。患者への関心と観察力も高まり、主体的な行動につながったと考える。

4 年生は、【自分から指導者に助言をもらおうとしたり、自分たちから自主的に調整して頑張る】というように、主体的な行動はさらに高まっていた。【メンバーとの支え合いや、周囲の助言から力を得たり、なりたい看護師像が明確になり、頑張ろうと思う】と将来のビジョンを描きながら実習に臨んでいた。4 年生は卒業も近づき、進みたい専門分野や看護師モデルを現実的に検討しながら実習に取り組んでいることがうかがえる。この時期になりたい看護師像を明確にできることは、今後の学習に向かう気持ちを高めるだけでなく、職場選択や就業継続にも影響を与える可能性があると考える。

＜引用文献＞

①厚生労働省、看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査（統計情報・白書）
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001022606　2016/09/03
②2015 年 病院看護実態調査、
http://www.nurse.or.jp/nursing/practice/faq/pdf/jittaichosa.pdf
日本看護協会　2016/09/08
③久常節子、今後求められる看護師の資質と教育～20 年後の看護職確保の観点から～
www.mhlw.go.jp/shingi/2008/05/dl/s0526-2e.pdf　2016/09/03
④江川幸二他、看護学生の臨地実習における戸惑いとその要因、東海大学健康科学部紀要、7 巻、2001、1－8
⑤布作真理子、臨床実習において看護学生が看護上の判断困難を感じる場面における指導者の働きかけ、日本看護科学会誌、19 巻、2 号、1999、78－86
⑥馬場美幸、安東由佳子、実習への取り組みに関する自己決定関連要因の検討、日本看護福祉学会誌、23 巻、2 号、2018、79－91
⑦畑野快、大学生の自律的な学習動機づけの検討―学習・キャリアの変数との関わりから― 青年心理学研究、24 巻、2013、137－148
⑧清水裕著、堀洋道監修、山本眞理子編、心理測定尺度集Ⅰ人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉、自己評価・自尊感情、サイエンス社、2002、26－31
⑨坂野雄二、東條光彦、一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み、行動療法研究、12 巻、1 号、1986、73－82
⑩Aaron Antonovsky、山崎喜比古（翻訳）、吉井清子（翻訳）健康の謎を解く―ストレス対処と健康保持のメカニズム、有信堂高文社、2001、22－23

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小松　万喜子 (Komatsu Makiko) (50170163)	愛知県立大学・看護学部・教授 (23901)	
研究分担者	曽田　陽子 (Sota Yoko) (80405224)	愛知県立大学・看護学部・准教授 (23901)	